

短 報

マメ科の新帰化植物ハナヌスビトハギ *Desmodium elegans* DC. (大橋広好^a, 伊藤隆之^b)
Hiroyoshi OHASHI^a and Takayuki ITOH^b: *Desmodium elegans* DC. (Leguminosae)
Naturalized in Japan

最近韓国や中国原産種の種子が新道路建設工事の際に緑化と崩壊防止のために法面に播かれ、それから育ったと思われる帰化植物が日本各地から知られるようになった。その中には日本在来種と同種あるいはその近縁種が多く含まれており、それらは在来種と交雑しやすく、遺伝子汚染も生み出し、短期間で在来の自然フロアを壊す可能性が高いと思われる(中田他 1995, 大橋 2002)。このような輸入帰化植物の一つと考えられるものに、中国からのマメ科 *Desmodium elegans* DC. が混ざっていた。日本で帰化状態で見つかったのは初めてである。日本には近縁種はないが、本種はヌスビトハギ属 *Hylodesmum* の姉妹群である(Kajita and Ohashi 1994)。

この植物は愛媛県西条市藤之石吉居、林道笹ヶ峰線、道路の法面で1990年頃に故三木正夫氏によって見いだされ、その後愛媛県周桑郡丹原町明河余野の三木氏宅でヌスビトハギ属の植物として栽培されてきた。しかし、伊藤は1995年以後5回にわたり三木氏の記憶しておられた生育地を調査したが、本種を再発見できないでいる。三木氏の発見地と伝えられた場所は現在ではスギとヒノキの植林地であり、*D. elegans* はおそらく植林の発達で消失したのではないと思われる。国内各地の道路法面で中国原産のマメ科植物が見いだされており、今後どこかで見いだされる可能性があると思われるので、原帰化地では失われたが、ここに記録しておきたい。

Desmodium elegans DC. はアフガニスタン、パキスタン、カシミール、インド北部と中部、ネパール、シッキム、ブータン、チベットから中国中部まで分布し、変異に富み著しく多型であって、その学名が安定したのも近年になってである(Ohashi 1971, 1973)。今回の帰化品は *D. elegans* の典型的な形に当たり、自生地では最もふつうに見られる形で, subsp. *elegans* var. *elegans* に当たる。以前はこの形に対して *D. tiliifolium* (D. Don) Wall., *D.*

cinerascens Franch., *D. esquirolii* H.Lévl. などの学名が用いられていた。

本種は自生地では低木であることが多いが、高さは3 m 以上にもなることがある。大橋は1967年にインド・ダージリン市内の公会堂前で4 m 位の高木となっているものを見た。葉は3小葉。托葉は開出して濃褐色、狭卵形から狭三角形、長さ4–10 mm。頂小葉は変異が著しいが、ふつうは菱状の広楕円形から広卵形、鋭頭から鋭先頭、両面に軟毛あり、へりに達する4–9 対の側脈があり、全縁またはやや円鋸歯状。花序は偽総状から複偽総状、1 節に2–3 個の開花する花がつき、基部に1–6 個のつぼみがつく。小花柄は糸状、長さ4–22 mm。花はふつう長さ10–20 mm。果実は節果、扁平、4–9 個の小節果よりなり、向軸側のへりはほぼ直線状で下部縫合線は波状、節は果実の幅の約1/2 幅、伏した絹毛が疎生または密生し、鉤毛はない。なお、本種の形態と変異についてはOhashi (1971) に詳しく記載されている。

本種の図はヒマラヤや中国の代表的なフロアには案外少ない。Hara, Flora of Eastern Himalaya 2nd Report (1971) の中では多数の標本写真と花、豆果、種子の線画が示されている(Ohashi 1971)。Polunin and Stainton (1984) に花期の写真がある。中国植物志には図がない。中国高等植物図鑑2 (1972) には *D. esquirolii* H.Lévl. として描かれている。

日本で初めて本種を記載したのは石井(1953)の園芸大辞典と思われる。学名は *Desmodium tiliifolium* (著者名なし)、和名はマルバハギ、ヒマラヤ原産、大正中頃に渡来したとしている。しかし、どこから渡来したものかまた日本のどこに渡来し栽培されていたのか不明である。前川文夫先生が植物名を同定した木下杢太郎の「百花譜」の624番(同書では621番)に南京櫨として、1944年7月23日に小石川植物園で栽培されていたものが描かれている。1978年頃に前川先生から

「これはマメ科と思うが」とお尋ねがあり、*D. elegans* DC. ではないかと大橋がお答えしたものである。この図から本種は1940年代初めに小石川植物園に栽培されていたことが分かる。あるいは日本で初めてここに導入されたのではないかと想像できる。多分この当時（1977–8年頃）であったと思うが、津村研究所におられ本誌の編集をなさった故佐々木一郎氏から本種が東京医科歯科大学構内に植えられていたことがあったということも聞いた憶えがある。東北大学生物学教室植物標本館 TUS には伊藤篤太郎の標本があり、ラベルに「*Desmodium?* ヒマラヤ産と言う。14/X/09. 伊藤篤太郎方栽培」とある。この標本は1909年（明治42年）に伊藤氏の自宅（東京?）で栽培していた株から作られたものであろう。同氏は日本とヒマラヤの植物が近縁な関連にあることを日本で初めて紹介したので、ヒマラヤ産の植物に関心が強かったと思う。伊藤篤太郎は1921年（大正10年）10月から1928年（昭和3年）3月まで東北帝国大学理学部生物学教室に講師として勤務した。

本種は仙台でも栽培できる。中国四川省原産の1個体が仙台市北部の大橋宅で高さ2.5 m、根元で直径4 cm 程に育ち、夏から秋によく開花した（Fig. 1）。花はピンクから赤紫色で偽総状花序に多数がつき、美しく、花期は長い。豆果はよくつき、多くは不稔であったが一部に種子ができ、親個体は枯死したが、現在（2002年）はそれから発芽した個体が生育している。

本種の和名マルバハギは石井（1953）によるもので、園芸大辞典が原出典であろう。しかし、この和名は破棄すべきものである。マルバハギという名はハギ属の *Lespedeza cyrtobotrya* Miq. の和名としてすでに1884年（明治17年）の松村任三日本植物名彙や1886年（明治19年）の帝国大学理科大学植物標品目録に用いられており、*L. cyrtobotrya* の和名としてすっかり定着している。*Desmodium elegans* は新たにハナヌスビトハギと呼びたいと思う。種形容語の *elegans* のとおり、美しい花をつける。ヌスビトハギ属の名は *Hylodesmum* 属に移されたが、本種の和名と



Fig. 1. *Desmodium elegans* DC. cultivated at Sendai, photo by Y. Fukuda 12 July 1992.

して分かりやすいと思う。中国名は中国植物志では円錐山蚂蝗または総状花序山蚂蝗で、花序の形状に由来する。

Desmodium elegans DC. in Ann. Sci. Nat. 4: 100 (Jan. 1825); H. Ohashi in H. Hara, Fl. East Himal. 2: 278 (1971); Polunin et Stainton, Fl. Himalaya fig. 317 (1984); 中国植物志 41: 40 (1995).

D. tiliaefolium (D. Don) G. Don, Gen. Hist. 2: 297 (1832).

D. cinerascens Franch., Pl. Delavay. 174 (1890).

D. esquirolii H. Lévl., Fl. Kouy-Tchéou 232 (1914-15); 中国高等植物図鑑 2: 448 (1972).

証拠標本：愛媛県周桑郡丹原町明河余野，故三木正夫氏宅にて栽培。帰化原産地：西条市藤之石吉居，林道笹ヶ峰線，道路の法面。8 July 2001. 伊藤隆之 (TUS).

写真を提供して下さった武蔵高等学校・中学校校長福田泰二博士にお礼申し上げます。

引用文献

- 中国科学院植物研究所. 1972. 中国高等植物図鑑 2. 科学出版社，北京.
中国科学院中国植物志編集委員会. 1995. 中国植物志 41. 科学出版社，北京.

石井勇義 (編) 1953. 園芸大辞典 4. 誠文堂新光社，東京.

Kajita T. and Ohashi H. 1994. Chloroplast DNA variation in *Desmodium* subgenus *Podocarpium* (Leguminosae): Infrageneric phylogeny and infraspecific variations. J. Plant Res. 107: 349-354.

木下空太郎 1979. 百花譜. 上下. 岩波書店，東京.

松村任三 (編纂)，矢田部良吉 (関) 1884. 日本植物名彙. 丸善蔵版.

中田政司，関 太郎，伊藤隆之，小川 誠，根岸得之助，熊谷明彦，工藤 信 1995. 最近道路法面に発見されるキクタニギクとイワギクについて. 植物地理・分類 43: 124-126.

Ohashi H. 1971. A monograph of the subgenus *Dollinera* of the genus *Desmodium* (Leguminosae). In: Hara H. (ed.), Fl. East Himalaya 2: 259-320.

—— 1973. The Asiatic Species of *Desmodium* and Its Allied Genera (Leguminosae). 318 pp., 76 pls. Ginkgoana 1. Academia Scientific Book, Inc., Tokyo.

大橋広好 2002. 分類学私考. 分類 2: 65-73.

Polunin O. and Stainton A. 1984. Flowers of the Himalaya. Oxford University Press, Delhi.

帝国大学編纂 (松村任三) 1886. 帝国大学理科大学植物標品目録. 丸善商社，東京.

(^a東北大学大学院理学研究科
附属植物園津田記念館，
^b愛媛県立西条高校)

ハギ属の帰化植物 4 種 (大橋広好^a，根本智行^b，伊藤隆之^c)

Hiroyoshi OHASHI^a, Tomoyuki NEMOTO^b and Takayuki ITOH^c: Four Naturalized Species of *Lespedeza* (Leguminosae) in Japan

最近著者の一人伊藤によって愛媛県・香川県内の道路法面で多くのハギ属植物が採集された。標本を調べた結果，中国原産であろうと思われる 3 種の新帰化品と最近帰化と記録された 1 種とが含まれていた。新帰化品の種名は大橋 (2002) が既に紹介したが，ここで詳しく記録しておきたい。また，1999年に山口県から真崎 (1999) によって帰化が記録されたオクシモハギについても併せて記録しておきたい。ここに報告する 4 種のハギは中国に共通して野生するものであることから，多分中国の原産であろう。キク科植物の場合

(中田他 1995) と多分同じように，種子で輸入され，おそらく道路工事に際して建設業者により新道の法面に吹き付けられ，それから生育したものと思われる。

1. *Lespedeza davurica* (Laxm.) Schindl. オオバメドハギ

オオバメドハギの自生地は朝鮮，台湾，中国，モンゴル，キルギスタン，およびロシアのシベリア，アムールから沿海州である。本種の図は中井猛之進 萩類の研究 88-89ページ (1927)，中国高等植物図鑑 2: 2651 図 (1972)，中国植物志 41: 39 図版 (1995) など